ーただキリストと共に歩むー

水戸無教會

編集　半田梅雄

第十六号

ひとすぢの道

ーーーー来　信ーーーー

去る九月十七日夕方ラヂオ婦人の時間で午後一時より「ひとすぢの道。」内村鑑三、を山本安英さんの朗読で聞かせていたゞきました。武士気質の生粋のサムライの家に生れ、鑑三の血管には生くることは戦うことなり、とのすさまじい闘魂と、生くることは働くことなり、との勤労と平和と静粛とを愛する血を受けて生れたこと。

二十四才の時結婚の心の痛手と霊魂の悩みにアメリカへ渡り白痴児童の看護夫として働き、併し慈善事業は放蕩息子の梅毒をいやすようなもので彼を救ってはくれなかったと。又洗礼を受けてから七年、やっと人は修養や善行で救われるのではない、キリストを信じキリストを仰いで救われるのであることがわかり、彼は救われ、生れ変り、平安を得、悲嘆懊悩は消えて歎喜と希望の人となったこと。又ハートフォード神学校に入学したが、神学校と神学生の生活がいたく彼を失望させキリストの福音を信じて生きようとする者に取っては、神学について読むこと少なければ少いだけそれだけよい事を痛感して、居ること僅か四ヶ月、惜し気もなく学校をすてゝ直ちに帰国したこと。

それからは国粋的保守主義者でも、反動的愛国論者でもない、彼はユニークなキリスト教愛国者としてユニークな思想と立場とを取って日本自身の東洋流の衣をまとうて日本自身の国土にはえ出ずるキリスト教たらしめたこと。

それ以後は中学校不敬事件、加寿子夫人の死、国賊と呼ばれ、妻に死別し職に追われてあてもなくさまよったこと、エリ、エリ、ラマサバクタニ、神よ汝、いまし給はざるやと。併し書をかくことに専念し幾多の迫害と戦いながら、今は、世界の人、ひとすぢの道を生き通した人であると。そして御長男様や美代子婦人の御声、先生と親しく接した人々、又最後に心臓病の看護にあたられた君方道子様のお声など聞かせていたゞき唯々胸が熱くなるばかりで御座いました。内村先生は最後に看護の方に言われた相です。

世間の人は偉人というであろう。併し自分は十字架にすがる幼子にすぎなかったと。讃美歌をうたってる人の中で何人このことがわかるであろうと七十才の幼子はねむるが如くその魂を神の胸にゆだねたと。

それ以後私は実に内村先生を尊敬する様になりました。神の最上の私への送りもの、と胸に手をあてゝ神の恵みを心におし抱きました。今内村先生がベルに書き送った二十八才から六十七才までの自叙伝的書翰集を読ませていたゞいて居ります。

羽根を失った鳥、鳥としての性能をすっかりもぎとられてしまった小鳥にも神の愛は日一日とあたゝかくなぐさめはぐくんで下さいます。神こそはすべてのものを生かしてくださることを私は心から信じます。

水戸　Y姉より

汝らも去らんとするか

―――ヨハネ伝六・六七―――

石原秀志

水青きガリラヤの湖を見下す緑の丘辺が次第に夕映の静けさの中に包まれてゆく頃、心をこめて語り給うイエスに聞き入る五千人の大群衆。やがて彼等は不思議な方法で夕のパンを与えられた。霊の糧の豊かな饗宴に次いで今肉の糧にも飽く事が出来たのである。正しくガリラヤにおけるイエスの声望の絶頂であり、民衆がイエスを捉えて王としようとしたのも当然の事だと考えられる。

しかしイエスはそれをはっきりと避けられた。続いて押掛けて来たユダヤ人達に対して御自身天より下り来った生命のパンである事を明らかに告げられた。しかしユダヤ人達は勿論納得するわけには行かない。イエスの正体が果して何であるかに彼らは強い疑いを抱くに至った。かくてガリラヤ湖畔に於ける絶頂の時は去って、イエスの声望は次第に褪せて行く。恰も輝きを増した夕映えの空のやがて暗黒の色を深めて行くが如くに。

イエスに躓いた者達は民衆の代表者としてやって来たユダヤ人達のみではなかった。弟子達（としてとにかくその時迄行動して来た者達）の大部分も遂にイエスに従う事の愚を悟った。民族の解放者＝救済者として期待し師事して来たにも拘らず、イエスには少しもそのような意図のない事が明らかになったからである。彼らは失望と憤りとを以ってイエスを棄て去ったのであった。

「去って行く」とは直訳的には「後の物へと往けり」（佐近義弼氏）の意である。弟子達は前のものを目指して進むべきであった（ピリピ3：13）にも拘らず、一八〇度の方向転換を敢てして、後に置いて来たものを目指して走り去ってしまったのである。彼等はイエスと共に神の国に向って歩んで来たのであるが、今やその事に全く意義を見出す事が出来なくなってしまったのであり、もっと現実を捉えた人間社会の生活条件の革新こそ遙に重要な目標であらねばならぬという判断が彼等の行先を転ぜしめ再びイエスと行を共にする事を断念させたのであった。

既にユダヤ人の中で主導権を握る者達は律法破壊者という判定の下にイエスを除く事を決意していたが（ヨハネ5：18）、更に此処に民衆の指導者達の躓きを見、弟子達の多くのものも亦彼を棄て去る事態となるに及んで、イエスを廻る状況は急激に不利なものとなって来た。そしてそのような状況の下に於て、十二弟子達は「汝らも去らんとするか」という問をイエスから与えられたのである。

「主よ、あなたを棄てて私たちは誰の所に行くと云うのですか」弟子達の気持を代表してペテロは叫んだが、少くも彼自身にあっては、生きる事はイエス・キリストと共にある事であり、前進とは彼の進み行き給う所に従って行く事であった。永遠の生命の言そのものであるイエス・キリストこそ神より出でた唯一の聖なる存在である事を彼は硬く信じたのみならず、更にその事は彼にとって深い喜びを伴う知識であった。（グッドスピード訳）

我々は此の出来事の中にイエス・キリストの福音のもつ「狭さ」をはっきりと教えられる。しかし、ペテロの応答を唯悲壮な告白として理解すべきではない。それは単なる主君への忠誠心の表明といった事ではない。彼をして此の告白を為さしめたのは、あのピリポカイザリアの時と同じく（マタイ16：11）、彼の血肉ではなくして、上よりの知慧である。

イエス・キリストを信ずる途は勿論坦々たるものではない。しかしその途を歩むものは、人には如何に見られようとも、少くとも彼自身の衷には「悲壮」なるものとしての意識は起らない。彼を絶えず励まし支えてくれるのは、その信仰の歩みの中に溢れ来る歓喜と平安とである。

悔い改め

---使徒行伝研究---（十一）

二章三七節ー四二節

半田梅雄

イエスはその宣教のはじめ、「悔い改めよ、天の国は近づいた」と云われた。「悔い改め」が極めて重要で、一人のキリスト者の誕生に欠くことのできない要素のようにみえる。然り、そうなのである。悔い改めのないところに眞の信仰は誕生しない。自分が如何に愚かであり、罪の為に盲にされていたものであるかを自覚しない限り、イエスを救い主（キリスト）と信ずることはできないからである。又一章で既に詳しく学んだ通り、「ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう。」（使徒行伝一ー五）とイエスは昇天の直前に云われた。何よりも大切なことは、福音書全体を通して私たちが知ることができるのは、イエスは固定した形式を造ろうとされなかったことである。壮厳な寺院や会堂の建設は彼の眼中にはなかった。わずらわしい儀式やケバケバしい衣裳は凡そイエスにふさわしくないものである。殊に悔改めのバプテスマの如きを、唯儀礼的に通過するだけで足れりとするような空虚な要求は、彼がむしろ憤りの対象としたものであることを私たちは知るべきである。イエスは職業宗教家を養う為に、世々変らない儀式を定めるために遣わされたのではない。そういう形式化は、恐ろしい宗教の動脈硬化を意味するものであって、パリサイ人に対するイエスの厳しい態度で充分諒解することが出来よう。（マタイ二三）要するに、「わたしは道であり、眞理であり、命である」（ヨハネ一四ノ六）とイエスが云われた言葉の内容が、人々の道となり、眞理となり、命となるか否かによってすべては決まるのである。

又「悔い改め」は、単に一つ一つの言葉や行為に誤りがあったから、これを訂正する為の反省や後悔、あるいは自己批判を指すのでないことは勿論である。

「悔い改め」はギリシヤ語でメタノイアと云う。転回を意味する言葉であると云う。私は自分の二本足で立っているが、今盲目であることがはっきりわかった。若し、盲目が自分勝手に歩いてゆくと何処へ行ってしまうかわからない。早く安全な方向に向きをかえたい。だから手を取って私の向きを正しい方向に直し、眞直ぐに歩かせて頂きたい、そう願う心である。今の今まで独立独歩でひとり歩きしていると自負した者が、自分も他人もすべて人は盲目だと知らされた時の、切ない希い、叫び、それを聞かれて、始めて正しき導き手に全身をしっかり支えられた心の状態である。自負心、自尊心の強い者にとっては、まさに百八十度の回転である。これが本当の回心である。

私たちはしばしば後悔や反省をする。顔回は日に三回反省するとして、孔子からほめられた。しかし、後悔も反省も、生活の土台、目標、態度を全然変えてしまうのではなく、そのうちの悪い部分を訂正して、過ちを少くしてゆくだけである。ところが、悔改め（メタノイア）はこれと全然質を異にする。自分のよい部分も悪い部分も全部ひっくるめて、生活の土台、生活の目的や目標、生活の態度等が、根本的に間違っていたことに気がつく新生への目覚めである。だから、自分の頭で自分を判断する後悔ではこれができない。自己批判では、自己批判をする自分の眼そのものの過ちまで発見することはできないのである。

さてペテロの前に集まった人々がじゅんじゅんと説くペテロの言葉に胸を刺されたのは、悔い改めに一つの前提とも云うべきものがあることを教えてくれる。則ち「私たちはどうすればよいのか」という質問ぐらい彼らが、自己の生活の土台、目的、態度に不安と行きづまりを感じていたかを明らかにするものはない。回心はたしかにある具体的な歴史的な機会を通して行われるものであることは、間違いない。しかし、その前提には、必ずその人自身の人生に不安と行きづまりとがある。この不安と行きづまりに拍車をかけるのが律法（おきて）であり道徳であり、良心の声である。病気や貧乏が、しばしばある人の人生に不安や行きづまりを感じさせる非常によい機会となるのは好き例であろう。病気で死と直面する時、貧乏で多くの人々から白眼視される時、人は人生の何であるかに根本的な疑いを持つはずであるから・・・

こうして選ばれた何人かゞ、とある機会に神様の前に連れて来られるのである。病気や貧乏はそれ自身決して喜ぶべきことではないが、そういう機会が彼に一八〇度の回転を与え、眞理目覚めさせてくれるなら、これはまさしく天与の恩恵と云わなければなるまい。

人生は、私達がかつて考へたように、よき結婚をして、よき子女をもうけ、生活は希望の消費に耐えられる程度に安定しているところに幸福の規準や目標があるのではない。むしろ私たちが、時には精魂を傾けて、他人も誘い自分もたゝかい取ろうとする悲壮な生活の安定が、一にぎりの資本家の手にではなく、唯一人の神の支配の下にあることに気がつくことにある。血みどろになって生活の安定を勝ちとろうとする執念の人から、他人が何と云おうと、唯一者の永遠の支配の力を信じ、安んじてすべてを委ねてゆくことによって、私たちの人生は開けてゆくことを、私達はペテロと共に信ずるのである。未来にではない、現に今私たちは誰にも犯されない平安とよろこびを持つ。誰がこれにまさるものを与え得るというのか。

サタンの陰謀と第二の試練（ロ）

ヨブ記研究(一〇)(2・7～13)

大森孝夫

私のヨブ記研究も今回で十回目となりました。たどたどしい筆致でやっとここまでたどりついたのです。勿論これは専門的、組織的とはおよそ縁遠い「私のヨブ記」です。聖書解釈の総元締と心得ている聖書学者、神学者等教会主義の人たちからは、まさに「無教会の百姓読みの最たるもの」と一笑のもとに捨て去られてしまうことでせう。しかし私はそれには全く平気なんです。がっかりなんかしません。なぜなら私は聖書やいわゆる「信仰」を飯の喰種にしている人種ではないのですから。だが私は得々としてこの勉強を続けているのでは決してありません。ご承知のようにヨブ記は単なる苦難の物語ではないのです。たしかに「ヨブ記は聖書中における最大の詩的作品であり、世界文学の傑作である。」と評価され、ヨブ記の作者は「旧約のシェクスピア」と呼ばれてはおりますが、私たちは一冊の名作文学書を机上にひろげ、あたまと筆とで一文をものするという評論家の如き権威をもってヨブ記に対することは絶対に許されません。それは本当に悲しいことです。なぜなら「聖書の中で他の何れの書物よりもヨブ記はすぐれており荘厳である。」と大いにルターが評価してくれなくとも、ヨブ記は神の御言をきくための聖典であり、深刻筆舌に尽くしがたきヨブの血と涙の苦難実験録こそヨブ記の最

大特質だからです。聖典にして血と涙の実験録は血と涙の中で信仰をもって読まれるべきが本当です。まことに苦難、苦悩、悲哀、懐疑等あらゆる辛酸をなめ尽くさずしてはヨブ記の真髄はわからないでしょう。私はヨブ記の勉強をしているとき、突如として（！）どこからともなく響いてくる恐しい「無自覚、無気力、怠惰な現在の生活に満足しているお前がこの血と涙のヨブ記の研究をするとは何とおこがましいことだ。偽善者め、何がお前にわかるものか。よせ、お前は傲慢だぞ。」という声に心を打ちのめさせられることがしばしばあるのです。そしてその声と共に以前は他人ごとのように軽く読み流していた八木重吉氏の

　もしも　今　この今
　エリアの火が
　焔々と　降るならば
　おそらくは
　もっと恐ろしい焔が
　教会に集うておる
　お召の淑女と
　ぞろりとした紳士の頭上に
　下るだろう

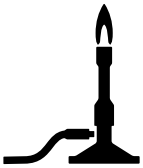
という詩が今は全く他人ごとではなく、恐しい強烈な現実の力を持って押迫り、私の筆もつ手を打震えさせてしまうのです。このために何度か私はヨブ記の研究を中止しようか、今日は原稿を書くのを止めようかと思ったか知れません。しかし、それにも拘らず私は今日まで勉強を続けて来たのです。原稿も休まなかったのです。これは一体どうしたことでしょうか。しかしよく考えてみますときに私は自分の力を、自分の意志でそれらを続けてきたのではありません。誇張なしに奇しき御力によって私は勉強させられ、書かされてきたと申上げます。勿論、いつ、いかなる時、その御力がどのようにして私をして学ばしめ、筆をとらしめたかを詳しく説明することはできません。だが私には一、二皆さんにお話できることがあるのです。それは私をあざけるサタンの声が聞こえてきても、いやその声が強ければ強いほど、私は一層イエスの御名によって、「ヨブ記を学ばせ給え。ヨブ記の眞理を教え給え。ヨブ記を通して御意を示し給え。苦難に当り、我何をなすべきかを教え給え。父よ、信仰なき我を救い給え。」と祈ったことであります。そしてこの祈りには水戸無教会及び埼玉の荒川兄など各地の主に在る兄弟姉妹の祈りが加えられたことであります。また昨年の妙高の丘における矢内原先生の御教示によることが極めて大であったことであります。私はクリスチャンです。しかし私はこの私がこれでもクリスチャンかと自分で自分に愛想がつきる程醜くゝ弱いものです。本当に傲慢、偽善という言葉こそ私に対して与えられたものだと思います。然し前に述べました通り、誠に恩恵なるかな、神様は私のかくまでの醜くさ、愚かさをすら活かして御用い下さるのです。罪人の頭、どんなにつまらない弱いものであっても、自分を棄てゝ死にもの狂いになってイエス様にすがりつくならばイエス様は私たちを救って下さいます。父なる神様はイエス様の御名によって祈る私たちの祈りに応えて下さるのです。私は聖書の研究は単なる情熱や人間的努力によってできるものではないと思います。私は以前に「祈りながら読み、読みながら祈る」ということが聖書の勉強の根本態度であるときゝましたが、正に然りと、私も私なりに貧しい体験から現在、はっきりと申上げることができます。演説や口先で伝道することはできません。先づ、心をつくし、精神をつくして聖書を学び神様の御心を御示し頂かねばなりません。しかして聖書の眞理は祈りによって聖霊を与えられた人のみしることができるのです。私は人が何といおうと、学者がどんなに権威のある説を書物に述べようとそれらに左右されるもので

は決してありません。私は他人の諸説や自己の醜愚をのり超えて、いよいよ一層祈りによって聖書を、ヨブ記を学んでいくのみです。

祈り以外から聖書を解かず、現在の与えられた聖書の眞理を拙くとも眞剣に祈りをこめて私なりに書き綴っていくのがこの私のヨブ記なのです。

（つづく）

（注）前文が長くなり紙面の関係で聖書の本文研究は次号に廻さなければなりませんでした。ご了承ください。



現代的クリスチャン

T先生が古いという君が、なぜ「イエスは古い」と言わないのか不思議で仕方がないなーー「どうして」って眼をむいているね。ぢゃ聞くが、君が言うように社会改造に眼を向けないクリスチャンが現代的クリスチャンでないなら、荒野の誘惑の一番はじめに「パンがなくとも人は生きられる」と聖書に書いてある」と言って、サタンを撃退したイエスはどういうことになるんだろうね・・・・。

自称無教会

「わたしは無教会ですから、自由な意思で酒も呑みます。煙草も吸います」と言いながら集会に出ていた人があった。その後東京に出て何年か経ったが、その人から集会のことや聖書のことについて手紙を貰ったり、話を聞いたりしたことは一度もない。

不愉快即愉快

今まで集会に出ていた人たちがだんだん減ってゆくことは決して愉快なことではない。情けなくさびしい気がする。しかし、そういうことに患わされている自分に気がついて、聖書がまるで自分一人のために書かれたように読める時程愉快なものはない。神様は実に公平な方である。

後　記

今年は冬の来るのが早いらしく俄に寒い。青い林に包まれていると思っている中に、もう庭木が色づき、早いものはかさこそと散り始めた。庭に出て落葉の一つを手に取ってみると、その色、形の美しさにさいばし我を忘れる。ソロモンや百合を出さずとも、恩恵は無限に我らを取まく。感謝の外はない。

（半田）

昭和三十一年十一月　発行
水戸無教会第十六号
実費十円〒共
編集兼印刷人　半田梅雄
発行人　松本文助
発行所　水戸市東原町
水戸幼稚園内　水戸無教会